

荒海の槍騎兵6

運命の一撃

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章 隘路^{あいろう}を衝^つく

9

第二章 レイテ湾炎上

61

第三章 試練の退路

93

第四章 はばたく魔鳥

125

第五章 母港の対決

147

第六章 帝都の守護者

197

終章

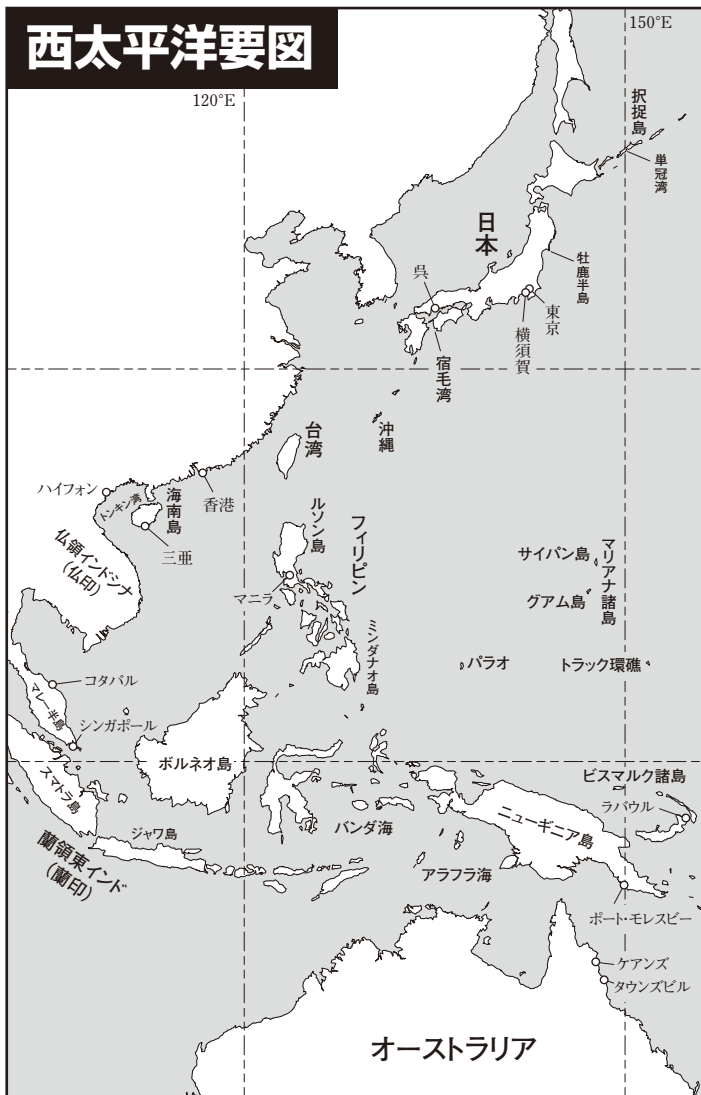
217

あとがき

232

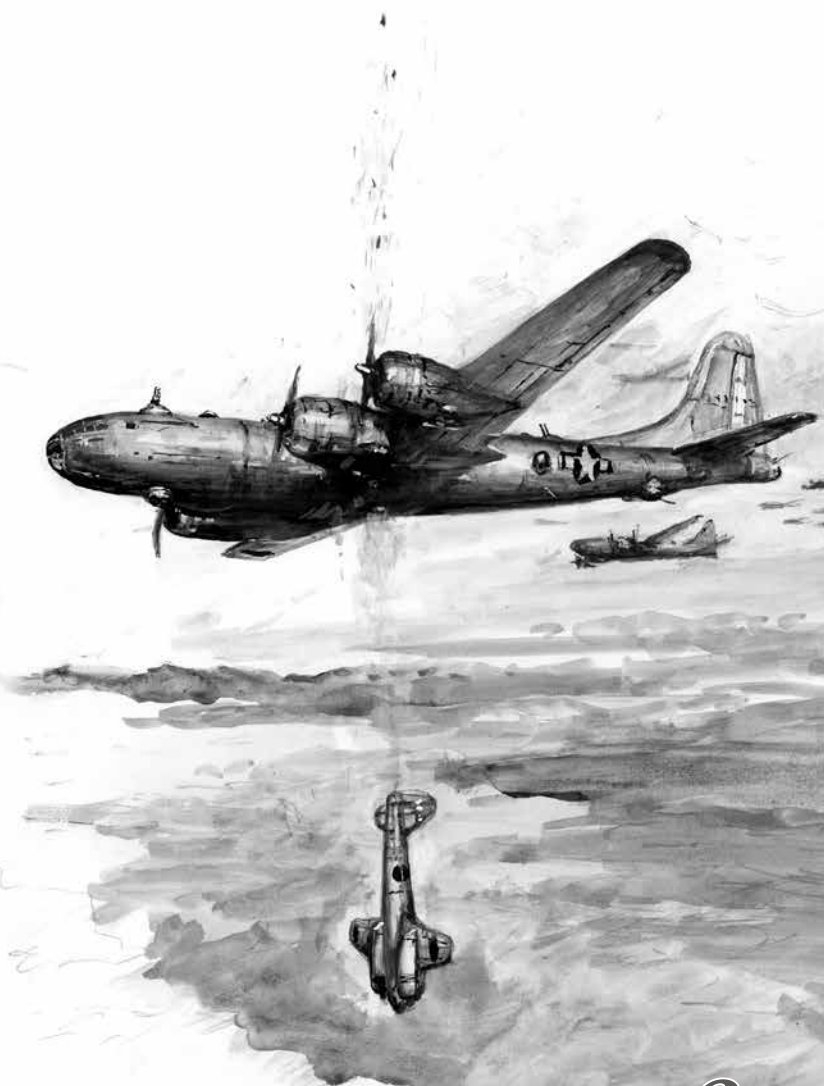


西太平洋要図



スリガオ海峡周辺図





荒海の槍騎兵 運命の一撃 6

第一章

隘路^{あいろう}を衝^つく

1

多数の航跡は、上空からはつきりと認められた。

スリガオ海峡——レイテ島と、ディナガット島、ミンダナオ島に挟まれた、レイテ湾の南側の入り口を北上している。

敵は二隊に分かれ、並進している。

駆逐艦とおぼしき小型艦が前面に立ち、その後方を巡洋艦と考える中型艦が進み、最後尾に戦艦が隊列を組んでいる。

戦艦のうち二隻は、際だって大きい。「大和」と「武蔵」——合衆国海軍のどの戦艦よりも大きく、重い、世界最大の戦艦であろう。

「古くさい陣形で来たな」

戦艦「ニュージャージー」より発進した水上偵察機ヴォートOS2U「キングフィッシュャー」の機長と偵察員を兼任するドナルド・パーキンソン中尉は

首を傾げた。

スリガオ海峡の出口は、「ニュージャージー」が所属する第三四任務部隊——新鋭戦艦六隻、巡洋艦六隻、駆逐艦二八隻が塞いでいる。

日本艦隊は、砲火の中を遮二無二突破し、海峡の外に躍り出す以外に選択肢はない。

当然、各艦種毎に、艦隊運動を行い易い複縦陣を組むものと考えていた。

ところが、日本艦隊は複横陣を組んでいる。

第一群、第二群とも、駆逐艦が横一線に並んで前面に立ち、後方でも巡洋艦が横一線に並んでいる。

最後尾に位置する戦艦も同様だ。

第一群、第二群とも、駆逐艦を楯にするような格好で、三列の横陣を組んだまま、前進して来る。

複横陣は、運動性や火力の集中といった面で複縦陣より劣る。日本海軍自身がそのことを、一九世紀末の日清戦争時に実証している。

その彼らが、自分たちの戦術を忘れたかのように、

複横陣を組んで来たのだ。

「何のつもりだ、奴らは？」

「T字戦法に対抗するつもりじゃないですか？」

操縦員のジェリー・ソール少尉が言った。

TF 34は、全艦がスリガオ海峡の出口に左舷側を向け、日本艦隊に全主砲を集中する態勢を取っている。日露戦争時に、東郷平八郎がロシア・バルチック艦隊に用いて以来、艦隊決戦時の必勝隊形とされている陣形だ。

第三艦隊司令長官ウィリアム・ハルゼー大將は、TF 34による日本艦隊の迎撃を決定したとき、

「トーゴの戦術を使って、トーゴの後継者たちを叩きのめしてやる」

と、幕僚たちに語ったというが、日本艦隊の指揮官も、合衆国艦隊の出方は予想しているはずだ。

それに対抗するため、敢えて複横陣という古い陣形を用いたのではないかと、ソールは考えたようだ。

『レイブニー』より『ポーラーベア2』

パーキンソンが「ニュージャージー」の通信室を呼び出そうとしたとき、

「敵艦発砲！」

ソールが叫び声を上げた。

同時に、機体を左に大きく傾かせ、急旋回をかけた。

若干の間を置いて、キングフィッツシャーの周囲で爆発光が閃き、爆風が機体を煽った。

ソールは機体をほとんど横倒しになるほど傾け、急旋回をかけるが、敵弾の炸裂は止まない。

後方で、あるいは左右で爆発が起こり、キングフィッツシャーは激しく揺れ動く。

嵐の中で舞い散る木の葉になったような気分だ。

『レイブニー』、どうした!？」

「ニュージャージー」の飛行長ギルバート・アダムス少佐が呼びかけて来る。

「こちら『レイブニー』。我、敵の攻撃を——」

パーキンソンは報告しかけ、言い直した。自機の

状況を報告するより、敵情を報せるのが優先だ。

「敵の隊形は複横陣！ 繰り返す。敵艦隊は複横陣を組んでいる！」

そこで話した直後、パーキンソンが初めて感じる強烈な衝撃がキングフィッシャーを襲った。人間に耐えられる限界を、遥かに超えていた。

パーキンソンは、四肢をもぎ取られるような苦痛を感じ、絶叫を上げた。

風防ガラスや偵察員席の側壁が瞬時に消失し、周囲の視界全てが、空と海に変わった。

空中分解によって、機外に放り出された二人のクルーは、叩き折られた主翼や吹き飛ばされたフロート等の残骸と共に、スリガオ海峡の海面に落下していった。

2

「敵水上機、撃墜！」

「報告電らしき通信波を傍受しました」

見張長を務める下条平治上等兵曹と、通信参謀市川春之少佐の報告が、第六戦隊旗艦「青葉」の艦橋に上げられた。

「我が方の陣形は、敵に知られたということでしょうか？」

「どのみち、戦闘開始の前には知られる。米軍の電探は、我が軍のものより高性能だからな」

不安そうな表情を浮かべた砲術参謀穴水豊少佐に、首席参謀桃園幹夫中佐は答えた。

米軍は、既に電探照準射撃を実用化している。

第二艦隊の巡洋艦、駆逐艦が複横陣を形成していることは、電探の探知距離内に入れば、すぐに突き止められる。

「問題は、我が方の意図を敵に悟られないかどうかだ」

司令官高間完少将が、艦の前方を注視した。

第二艦隊は、帝国海軍最強の戦艦「大和」「武蔵」

を中心とした第一部隊、大和型に次ぐ火力を持つ戦艦「長門」「陸奥」を中心とした第二部隊に分かれ、スリガオ海峡を北上している。

海峡に進入したときには、対潜警戒用の第一警戒航行序列——駆逐艦が傘型の陣形を組み、その後方に戦艦、巡洋艦が位置する隊形を取っていたが、海峡の最狭部を通過した直後、現在の陣形に改めた。「青葉」は僚艦「加古」と共に、第二部隊の左方に位置している。

「青葉」「加古」の右方に、第五戦隊の妙高型重巡四隻が並ぶ格好だ。

後方には、第二戦隊の「長門」「陸奥」「伊勢」「日向」が布陣している。

第二艦隊司令長官五藤存知中将が直率する第一部隊は、スル海では第二部隊の後方に位置していたが、現在は第二部隊の西側で並進している。

日清戦争時の黄海海戦で、清国の北洋艦隊が取った陣形に似ているが、このような陣形を取って

たのは、五藤長官の命令によるものだった。

一六時二四分（現地時間一五時二四分）、「右三〇度に島影。ヒブソン島と認む」

下条見張長が報告を上げた。

ダイナガット島の北西に浮かぶ小島だ。スリガオ海峡の北側出口に位置している。

海峡内に突入してから一時間余り、第二艦隊はスリガオ海峡の出口を望む海面に到達したのだ。

日没まで約一時間だが、空はまだ明るい。熱帯圏の強い日差しは、艦隊の左方——西側から照りつけて来る。

今のところ、視界は充分だ。

ただし、日が沈み始めてから夜が訪れるまでの時間は非常に短いため、注意が必要だった。

戦闘は、唐突に始まった。

正面の水平線付近に黄白色の閃光が続けざまに閃き、褐色の煙が立ち上ったのだ。

「来るぞ！」

高間が張り詰めた声で叫んだ。

第二艦隊の全將兵が、この瞬間はつきりと悟った。敵は予想通り、スリガオ海峡の出口で第二艦隊を待ち構えていた。

ヒブソン島と、レイテ島の東側に位置する小島、サン・ペドロ島を結んだ線より北側の海面に布陣していたのだ。

「旗艦より受信。『全軍突撃セヨ。最大戦速』！」
市川通信参謀が報告を上げた。

第一部隊、第二部隊の先頭に位置する第一、第二水雷戦隊の駆逐艦二六隻と、防空巡洋艦「能代」^{のしろ}「矢矧」^{やはぎ}が、真つ先に突撃を開始する。

「六戦隊突撃せよ。最大戦速！」

「『加古』に信号。『我二続ケ』！」

高間が力のこもった声で下令し、右方に並進する僚艦「加古」に命令が送られる。

機関の鼓動が急速に高まり、「青葉」が増速する。右舷側に目をやると、「加古」と第五戦隊の妙高

型重巡四隻が並進する様が見え、左舷側では第九戦隊の軽巡「北上」^{きたかみ}「大井」^{おおい}、第八戦隊の重巡「利根」^{とね}「筑摩」^{ちくま}、第四戦隊の重巡「鳥海」^{ちゅうかい}「摩耶」^{まや}が横陣を組んだまま、突撃を開始している。

「敵の指揮官の目には、我が軍が苦し紛れに古い陣形を取ったように見えているだろうな」

高間が呟いたとき、敵弾の飛翔音が聞こえ始めた。桃園を始めとする第六戦隊司令部の幕僚たちには、聞き覚えのある音だ。

トラクク環礁の沖で、敵の新鋭戦艦に追い回されたときに何度も聞かされた、巨弾の飛翔音だった。轟音が「青葉」の頭上を通過した直後、
「後部見張りより艦橋。敵弾、二戦隊の前方に落下。至近弾なし！」

「天和」『武蔵』の前方に水柱確認！」

二つの報告が、前後して上げられた。

前方に、新たな発射炎が閃く。

再び巨弾の飛翔音が迫り、後方へと抜ける。

今度も、直撃弾はない。

敵の戦艦群は、最大射程ぎりぎりまで撃っているため、容易に命中弾を得られないのであろう。

「砲術、敵との距離報せ！」

「三〇〇（三万メートル）！」

「青葉」艦長山澄忠三郎大佐の問いに、砲術長月形謙作少佐が即答する。

「あと四〇（四〇〇〇メートル）か」

高間が正面を見つめ、次いでちらと後方を見やつた。

敵が三度目の射弾を放った直後、左後方に雷鳴のような音が轟いた。

数秒後、「青葉」の真後ろからも砲声が伝わった。

第一部隊の後方に、褐色の砲煙が湧き出している。

巨弾の飛翔音が、今度は後ろから前方へと抜ける。

帝国海軍最強の戦艦二隻と、長く帝国海軍の頂点に君臨した戦艦二隻が、初めて敵艦に向け、主砲を

発射したのだ。

敵弾の飛翔音が前方から迫り、後方に抜ける。

「陸奥」「日向」に至近弾！」

後部見張りから、報告が届く。敵も二度の弾着修正を経て、精度を上げて来たようだ。

前方に新たな発射炎が閃き、「青葉」の後方から砲声が届く。

巨弾の飛翔音が後ろから前へ、次いで前から後ろへと通過し、「陸奥」と「日向」が至近弾を受けた旨、報告が上がる。

「敵距離二七〇（二万七〇〇メートル）！」

月形砲術長が報告した直後、前をゆく駆逐艦群の前方に、多数の水柱が突き上がった。

太さ、高さはさほどでもないが、数が多い。

敵の巡洋艦が、砲撃に加わったのだ。

「青葉」の左右両舷に、砲声が轟く。

四、五、八戦隊の重巡八隻が、二〇・三センチ主砲を振り立て、応戦を開始したのだ。

駆逐艦の頭越しに二〇・三センチ砲弾が飛翔し、

駆逐艦の前方には、敵弾が多数の水柱を噴き上げる。その遙か上空では、戦艦の巨弾が、大気を轟々と震わせながら飛び交っている。

敵巡洋艦の猛射を浴びながらも、一、二水戦は速度を落とさない。噴き上げる水柱の中に突っ込んでゆく。

「敵距離二六〇（二万六〇〇〇メートル）！」

月形が報告するや、前方の隊列で変化が起きた。

一、二水戦の防巡二隻、駆逐艦二六隻が、一斉に取舵を切ったのだ。

「六戦隊針路二七〇度！」

高間が大音声で下令し、山澄艦長が航海長松尾慎吾中佐と水雷長戸倉恭平少佐に命じた。

「取舵一杯。針路二七〇度！」

「右魚雷戦。雷速四〇ノット。駛走深度五！」

「取舵一杯。針路二七〇度！」

「右魚雷戦。雷速四〇ノット。駛走深度五！」

松尾が操舵室に命じ、水雷指揮所から復唱が返

される。

前方では一足先に、二水戦が変針を終えている。横陣を組んでいた防巡、駆逐艦が一斉に転舵したため、変針は極めて速い。

針路〇度の単横陣が、数秒で針路二七〇度の単縦陣に変わる。

「能代」「矢矧」と二六隻の駆逐艦が投雷したことは間違いない。合計二〇八本の九三式六一センチ魚雷が海中に躍り出し、四〇ノットの雷速で突き進み始めたのだ。

「『矢矧』の通信傍受。『二水戦、魚雷発射完了』」

市川通信参謀が報告を上げたときには、「青葉」は艦首を大きく振っている。

多数の味方駆逐艦や敵弾が噴き上げる水柱が、右に流れる。

艦が直進に戻ったとき、「青葉」は六、五戦隊の先頭に立ち、針路を二七〇度に取りついていた。直接目視はできないが、後方には第六戦隊の僚艦「加古」

と第五戦隊の妙高型重巡四隻が付き従っている。

前方には、第一部隊に所属する巡洋艦群——第四、第八戦隊の重巡四隻と、第九戦隊の重雷装艦二隻が見える。

「魚雷発射始め！」

山澄が、戸倉水雷長に下令した。

「魚雷発射完了！」

の報告が届いたときには、第一部隊の巡洋艦群も、投雷を終えている。

第四、第八戦隊の四隻もさることながら、第九戦隊の投雷は壯観だ。

「北上」「大井」が片舷五基ずつ装備する六一センチ四連装魚雷発射管から、一艦当たり二〇本、二艦合計四〇本の魚雷が放たれたのだ。

（特等席だな、こいつは）

状況の深刻さにも関わらず、そんな想念が桃園の脳裏に浮かんた。

重雷装艦二隻が、実戦の場で片舷の魚雷をいちど

きに発射したのは初めてだ。

桃園を始めとする六戦隊の司令部幕僚や「青葉」の乗員は、その光景を自分の目で見える幸運に恵まれたのだった。

「『加古』より信号。『我、魚雷発射完了』」

「後部見張りより艦橋。五戦隊、魚雷発射完了」

「よし！」

届けられた報告を聞いて、高間が満足の声を漏らした。

横陣を取って採用したのは、このためだ。

全艦が一斉に面舵か取舵を切れば、各隊は数秒間で、単横陣から単縦陣への変換を終える。

その上で雷撃を取行すれば、一度に多数の魚雷を発射できる。

いかにも水雷屋の長官らしい策だった。

「旗艦より命令。『左一斉回頭』」

「六戦隊、左一斉回頭！」

市川通信参謀の報告を受け、高間が下令する。

雷撃は、まだ終わっていない。

反転し、左舷側の発射管から投雷するのだ。

「航海、取舵一杯。針路九〇度！」

「艦長より水雷。左魚雷戦。雷速、駛走深度とも先に同じだ。命令あり次第発射せよ」

山澄が、松尾航海長と戸倉水雷長に命じる。

「取舵一杯。針路九〇度！」

「左魚雷戦。雷速四〇ノット、駛走深度五。命令あり次第発射します」

松尾が操舵室に下令し、戸倉が復唱を返す。

下士官、兵には、開戦前から「青葉」に乗艦しているベテランが多い。海兵団での基礎訓練修了後、すぐ「青葉」に配属され、この艦一筋という主のような男もいる。彼らが自らの手足のように、「青葉」を操っている。

敵弾が唸りを上げて飛来し、四、八、九戦隊の周囲に、弾着の水柱が上がる。

敵巡洋艦が、駆逐艦から巡洋艦に射撃目標を切り

替えたようだ。

「青葉」の左前方には、「大和」「武蔵」の周囲に、見上げんばかりの巨大な水柱が奔騰し、左正横から後方にかけては、「陸奥」や「日向」の周囲に、繰り返し敵弾が落下している。

「大和」以下の戦艦部隊も、主砲を振り立てて応戦しているが、今のところ直撃弾は得ていない様子だった。

舵が利き、「青葉」が艦首を振り始めたとき、「武蔵」の右舷中央に爆炎が躍り、黒い塵のような破片が、炎に乗って舞い上がった。

「いかん……！」

高間が叫んだ直後、「武蔵」は「青葉」艦橋の死角に隠れ、見えなくなった。

回頭に伴い、「加古」と第五戦隊の妙高型重巡が、視界に入ってくる。

第五戦隊の二番艦「妙高」、三番艦「那智」が、後方に黒煙を引きずっている。

回頭中に直撃弾を受けたのかもしれない。

「魚雷発射始め！」

山澄の力強い命令が響いた。

前方の「加古」や五戦隊各艦の左舷側海面に、細長いものが放たれ、海面に飛沫を上げる様子はつきりと見えた。

「魚雷発射完了！」

「『加古』より入電。『我、魚雷発射完了』」

戸倉と市川の報告が前後して届く。

第一部隊の巡洋艦は見えないが、四、八、九戦隊の各艦も投雷したはずだ。

魚雷の射線上には味方駆逐艦がいるが、駛走深度を深く取ったため、味方撃ちの心配はない。

一、二水戦の駆逐艦二六隻より二〇八本。巡洋艦群が左右両舷合わせて二一二本。

合計四二〇本の魚雷が、スリガオ海峡の出口を塞ぐ敵艦隊目がけて発射されたのだ。雷撃の規模は、空前と言える。

ただし、雷撃距離は遠い。

駆逐艦は二万五〇〇〇、巡洋艦は二万六〇〇〇の距離で投雷している。

魚雷の数が、遠距離雷撃に伴う命中率の低さを補えるかどうかは、まだ分からなかった。

「五藤長官の案だ。必ず上手くいく」

高間が、全員に聞こえるような声で言った。

桃園の脳裏に、初めて「青葉」の六戦隊司令部に着任したときの、五藤の挨拶が蘇った。

「言っておくが、俺の専門は水雷だ」

3

隊列の後方に位置する戦艦群の一斉回頭は、駆逐艦、巡洋艦よりも遅かった。

最も排水量が小さい「霧島」でも三万一九八〇トン、「大和」「武蔵」は六万四〇〇〇トンにも達するため、舵が利き始めるまでには、どうしても時間が

かかる。

それでも、第一部隊の巡洋艦六隻が回頭を終える頃には、「大和」「武蔵」も艦首を大きく左に振り始めていた。

この直前まで「大和」の後方にいた「武蔵」以下の戦艦群が、視界に入ってくる。

「武蔵」は、右舷中央付近から黒煙を上げている。

高角砲が集中している箇所^{かしよ}に、直撃弾を受けたよう^{うだ}だ。

「被弾一。損害^{ケイビ}軽微。戦闘・航行ニ支障ナシ」との報告は、既に「大和」の第二艦隊司令部に届けられていた。

回頭が終わった直後、「大和」と「武蔵」の間に多数の敵弾が落下し、多数の水柱が奔騰した。

高さは「大和」の艦橋を大きく超えており、頂^{いただき}を見ることはできない。

「武蔵」を狙^{ねら}った射弾が、回頭によって外れたものであるう。

崩れる海水の中に、「大和」の艦首が突つ込む。

大量の海水が豪雨^{ごうう}さながらに降り注ぎ、艦首甲板や主砲塔の天蓋^{てんがい}、艦橋を叩く。

降り注いだ海水は、川になって甲板上を流れ、舷^{げん}側から海に戻ってゆく。

「敵との距離は？」

「三〇〇！」
^{サンマルマル}

「大和」艦長森下信衛少将の問いに、砲術長能村次郎^{ろう}大佐が即答した。

森下も、能村も、昇進に伴って異動する予定だったが、米軍の来寇^{らいこう}が間近^{まぢか}に迫っていたため、「大和」の艦長、砲術長に留まっているのだ。

「もう少し距離を取る。各隊、針路一〇五度」

「各隊に打電。『針路一〇五度』！」

五藤の命令を、参謀長岩淵^{いわぶち}三次少将が通信室に伝えた。

「大和」の通信室から各隊に命令電が飛ぶ。

「面舵一五度。針路一〇五度」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。